論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文題名

歴史物語研究―語り・叙述

論文審査の要旨

本論文は第一部全四章、第二部全四章の計二部八章からなる。第一部「歴史物語の叙述」では、平安時代歴史物語（『栄花物語』『大鏡』『今鏡』）における歴史叙述の何たるかを、「身体」「漢才」「氏族観」「虚実」等の観点から分析しており、第二部「『今鏡』の〈語り手〉」では、歴史叙述と語り手との関係を論じている。

第一部第一章「歴史物語の身体―『大鏡』『栄花物語』を中心に」は、女性の身体がいかに扱われているかを語り論の一環として論じている。場面中の人物の視線と一体化した地点から他の身体を見るというのが『栄花物語』の方法であることを指摘し、全四二例を検証した結果、見る側には主に道長、見られる側は道長娘たちであり、とくに道長娘の彰子が禎子内親王（三条天皇皇女、生母は道長次女妍子、後三条天皇母）を四度にわたって見る箇所があり、そうすることで、彰子の視線から禎子の将来（物語の未来）が予言的に見届けられているという。一方、『大鏡』では、大宅世継という実体化した語り手を設定しているため、語りの内容が限定される。下臈の翁が高貴な女性の衣・髪等を見たとすることはできず、そのため世継の周辺に「女房・童部」による伝聞ネットワークが組織され、そこから情報を得たとされている。さらに、『大鏡』が女性たちの身体を暴露的に語ることで、政治的敗者たる所以を強調しているともいう。

第二章「歴史物語と人物評―『大鏡』の女性批判」では、『大鏡』における女性の問題をここでも俎上にのせ、女性の「才」を絶対悪とするその世界観を明らかにしている。道隆妻高内侍や道隆三女の才に対して、『大鏡』は批判的であり、道隆一族が零落した原因の一つにしている。さらに道隆息伊周についても、その過剰な才が禍をもたらし、かつ「生さかしい女」により失脚したとされている。さらに『大鏡』は語り手世継の妻は語りの場におらず、もう一人の語り手重木の妻は語り手としては失格とすることで、女性の視点を徹底的に排除したと論じている。

第三章「歴史物語の藤氏観―『大鏡』『今鏡』のなかの摂関家」では、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』はすべて摂関藤原氏の歴史を語りつつも、そこには微妙な差異があることを確認したうえで、『今鏡』が『大鏡』が最後に置いた道長を始発として語り始め、かつその語りの現在を嘉応二年（一一七〇）三月にしていることの意味を論じている。『今鏡』は藤原（松殿）基房の将来を寿いでいるが、それから数か月後に基房は殿下乗合事件により平家に打倒打擲され、治承三年（一一七九）には関白を停止されて大宰府に流される。『今鏡』の成立年時を確定できないにしても、『大鏡』が万寿二年（一一二五）に語りの現在をおき、通房（師実兄。数年後死去）の御報を祝して終っていたことを参照しつつ、たとえ平家政権の台頭があろうとも、藤

原氏の未来永劫の栄華が祈念され、かつ確信されているものとしている。なお本章では、歴史物語と物語文学において、源氏・藤氏とがいかに語りわけられているかについても論じている。

第四章「歴史物語の虚×実―歴史語りのソトとウチ」は、歴史物語の享受史を検討することで、飜って歴史物語とは何かを見通したもの。『讃岐典侍日記』『庭の訓』では、歴史物語に書かれていることを「実」とし、実体験に与するものと高く評価している。『無名草子』も「実」であることを前提に歴史物語の男性評に対する女性評を展開させたという。一方、男性の享受については、『愚管抄』『本朝書籍目録』等では、歴史物語を漢文史書とはあくまで弁別しており、とくに『愚管抄』では、歴史物語は「ヨキ事」しか記さないと批判している。とはいえ、『春の深山路』『徒然草』『御湯殿上日記』等をみると、それなりに歴史を知るうえで至便なテクストとして積極的に活用されていたともいう。ところで、『今鏡』では、紫式部の堕地獄説と源氏供養について語っている。しかし、『今鏡』は物語の虚言は人々を仏道に導く方便として評価しており、そのようなレトリックを駆使することで、実は『今鏡』が自身を「実」のテクストへと転換せしめたと説く。また、『愚管抄』のような批判があるも、『今鏡』の方法は、過剰なまでの「ヨキ事」の強調により、「ワロキ事」を暗示するところにあると論ずる

第二部第五章「『今鏡』の語り手設定と漢詩文―朗詠・紫式部を手がかりに」では、『今鏡』の語り手「あやめ」が、『大鏡』の語り手大宅世継の孫、父は学生、さらに紫式部の侍女であるとされていることの意味を、とくに漢詩文の引用の方法との関連のもとに論じている。『今鏡』は多くの人物の詩作を引用しているが（『栄花物語』では和歌のみ、『大鏡』では菅原道真の漢詩のみ）、そのために学生の娘という設定が要請されたという。その教えのもとに、「唐の歌、やまと歌などよく作り詠」んだことになるが、とともに、それがあくまで「耳学問」としての漢才であることをいう。さらに『今鏡』は紫式部を漢詩についての知識を隠さない女として造型することで（実際の式部は正反対）、あやめの歴史語りを根拠づけしているという。

第六章「五節命婦の造型―『古事談』『十訓抄』『秦箏相承血脈』とともに」は、語り手あやめに、「五節命婦（故人）」「主殿のみやつこ」という子供がいることの意味を論じたもの。あやめは永延から長保年間（九八七～一〇〇四）に琵琶湖の舟上で生まれ、都に約百年（白河天皇の治世まで）、山城狛に約五十年（白河・鳥羽院政期）、その後は春日野におり（後白河天皇の時代）、都を離れて以降の情報源として、この「主殿のみやつこ」の設定が必要であったという。また、「五節命婦」は、『古事談』『秦箏相承血脈』『十訓抄』等にも登場する周知の説話的人物であり、琴の名手で後朱雀帝麗景殿女御（頼宗の娘藤原延子）に仕え、のちに嵯峨に隠棲したとされる。『今鏡』には頼宗流の管弦等の多くの音楽説話が語られているが、その情報源として、この命婦の設定が必要であったという。

第七章「『今鏡』における観音信仰―〈歴史の語り手〉は観音の化現か」では、第四、五章で論じたあやめと紫式部との関係をふまえて、『今鏡』の語り手についての最終結論をだしている。巻十「作り物語の行方」章段で、聞き手たちが地獄におちた紫式部の供養がしたいと提案したのに対して、あやめは、『法華経』「観世音菩薩普門品」をふまえつつ、紫式部は三十三身に応現する観音菩薩であり、『源氏物語』の執筆は人々を仏道に導くための方便であったとして式部を全面的に弁護する。そして自身も来世では式部のように木下で法を説きたいといって姿を消す。すなわち、あやめは式部と同体であり、『源氏』と同様に人々を仏道に導くべく、

「なさけある心ばへ」や「世のはかなきこと」をおりまぜた歴史語りをしていることになる。そして、『今鏡』の原本が三十三帖仕立てであったことをも含めて、この仮説を補強している。

第八章「歴史語りにおける語り手の記憶と記録」では、歴史物語は非識字層の語りであるという結論づけをしている。『法華経』との関わりで歴史語りを位置づけるのは『今鏡』だけでなく（第七章）、『大鏡』も法華経を説く「講師の説法（雲林院の菩提講）」に自らの歴史語りを擬えている。彼ら語り手たちの知識は、文字テクストからでなく、耳から得たものであり、非識字層向けのものであるという。それは、仮名＝声、という装置によりまさに紙テクストの上に現前している。さらにまた、『増鏡』になると、そのような語りは単なる偽装でしかないという批判するようになり、そこに陶山氏は時代性をみている。

以上、あらあらみてきたが、平安時代の仮名文字テクストのなかで、和歌・物語文学・説話文学・女流日記の研究に比して、歴史物語の研究は著しく遅れている。もちろん、注釈的研究の優れた業績はあり、また作者や成立等の問題についても研究史的蓄積があるが、これら歴史物語を文学論として扱う研究が皆無に近いのである。研究の進んでいる『大鏡』にあってもそれは例外ではなく、桜井宏徳氏『物語文学としての大鏡』（新典社、二〇〇九年）という著書があるだけであり、『栄花物語』、ましてや『今鏡』の研究になるとはなはだ覚束ないものがある。それはおそらく、歴史物語があくまで「歴史」テクストであることが、文学研究者の敬遠する理由になっていると思われる。しかし、過去を因果論的に構成するという物語行為と歴史とは不即不離の関係にあり、歴史物語論は実は物語文学論の王道かもしれないのである。本論文は、歴史物語全体の表現構造をトータルにとらえることで、歴史叙述や語り手という大問題になんらかの解答をださんとしており、陶山氏のこのような果敢な研究姿勢をまずは評価したい。

第一章で、登場人物の視線に一体化した地点から世界を把えるという『栄花物語』の方法を確認したうえで、語り手を実体化している『大鏡』『今鏡』が、伝聞で知り得た情報とすることで合理化をはかっているという表現論史論は歴史物語論として初めての試みである。また、第一章、二章で論じられている「男」の語り手という問題域の発見も評価される。『大鏡』が、女性の身体を暴露し、女の「才」に否定的である点に、語り手の位相を確認している。また第五、七、八章も、『大鏡』『今鏡』の語りをさらにパロールの問題として扱っている点に特徴がある。『大鏡』の語り手は、「男」であるにもかかわらず、漢文等の書記言語（エクリチュール）の世界は聞き手の若侍が引き受けており、あくまで非識字層の語り手として設定されているという。女から男への語り手の転換は、音声言語から書記言語の世界への転換ではなく、この男は音声言語の世界の住人であるという。「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」（『土佐日記』）として、仮名文字テクストの語り手を女としてスタートしたのが平安時代文学史であるが、『大鏡』は再び男の語り手を登場させつつも、男のパロールの世界が始めてここに定位されたのであり、この指摘は今後の『大鏡』研究の発展に寄与するものと評価される。また、それを受けて、『今鏡』が再度語り手を女性としつつも、語り手あやめの出自に何重にも工夫を加えることで、『大鏡』以上に、漢詩をはじめとした様々な素材を語る対象とし得たとする指摘も評価される。そして、『大鏡』『今鏡』にみる、このような非識字層相手の語りが、仏教の説法に擬えることで定立されており、この仏法との関係については研究史的

に様々論じられているが、非識字層の語りというアプローチからの接近は本論文ならではのものである。また、語りの現在が嘉応二年であることから、平家政権の時代にそれから意図的に目をそらすという姿勢に、『今鏡』の作者の時代に対するスタンスの取り方を探る第三章、語り手あやめに二人の子供がいることを論じた第六章、さらにはまた、歴史物語がどう享受されてきたかを説く第四章と手堅い論がならんでいる。

最後に一つ注文をつければ、本論文の全叙述を、平安時代末期における歴史叙述とは何かという巨視的観点からもう一度対象化していただきたい。歴史をめぐる多様な言語状況の中に、歴史物語をおくとどうなるのか。この時代、官撰国史のような権威ある書物は存在しない。確たる歴史軸のないところで、各貴族たちは日次の漢文日記を書きつぐことで、先例を蓄積し、家単位でようよう「次第」なるものの確立をはかっていた。このような状況下で、歴史物語の表現を位置づける必要があり、とくに、語り手の設定、語りの現在の設定、さらには現場主義的な語り、因果論的語り……、そこには語る行為と歴史との関係をみつめる新たな歴史・物語認識があるのではないのか。『大鏡』『今鏡』等の鏡物にみる実体化した語り手について、現場に居合わせた人物を語り手とすることで、話に信憑性をもたせるという類の議論があるが、百歳をも超える虚構の語り手を設定することが話に信憑性を付与するはずもなく、語り手の設定はすぐれて方法的・認識論的問題なのではなかろうか。また、この時代に、『江談抄』『中外抄』『富家語』というテクストが次々と生まれ、これらは談話（物語）の筆録という意味で歴史物語と似ているともいわれているが、これらは大江匡房や藤原忠実の語りであるからこそ価値があったのであり、同じく物語の筆録といっても、その点、歴史物語の語りとはまったく質を異にしている。陶山氏の更なる研究の発展を期待してやまない。

以上を以て、陶山裕有子氏の論文が博士（日本語日本文学）の学位にふさわしい業績であることを審査員全員一致で承認した次第である。

以上

論文審査委員：　主査　神　田　龍　身　教授
兵　藤　裕　己　教授
深　澤　　徹　特別非常勤講師
（神奈川大学外国語学部教授）